

早稲田大学 法学部 国語 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク式・記述式併用
試験時間	90分(古文1問、漢文1問、現代文2問)
難易度	昨年並み

〔大問別講評〕

(一) 古文。『増鏡』。

《本文字数:約 1300 字＝昨年より約 250 字増加。設問数:7＝昨年と同じ。》

小問	難易度	コメント
問一	やや難	【傍線部理解】前文から中納言が妹に恋心を抱いていると読み取れる受験生は少ないだろう。第五段落の末までの内容から判断する。
問二	易	【品詞分解】「げに」は副詞、「惜しかり」は形容詞、「ぬ」「べき」は助動詞。
問三	標準	【敬意の対象】b・c＝二方面敬語。右大臣が娘に琴をひかせている。 d＝右大臣に呼ばれた中納言が御簾の中に控えている。
問四	やや難	【傍線部理解】問一と同じく、中納言の妹への思いを読み取れたか。
問五	やや難	【主語判定】3＝姫君と合奏をして涙を浮かべるのは誰か。 5＝姫君が帝に愛されることをこらえきれそうにないのは誰か。
問六	標準	【傍線部理解】重要古語「よろし」に着目して選択肢をしぼる。 ホは、後半が次文の内容とつながらない。
問七	標準	【内容合致】ニは第二段落の末に合致する。消去法も有効である。

(二) 漢文。出典:王仁裕『開元天寶遺事』。

《本文字数:253 字＝昨年より 94 字増加。設問数:5＝昨年と同じ。》

小問	難易度	コメント
問八	やや易	【空欄補充】「音信・音耗」は「手紙・消息・たより」の意。
問九	標準	【理由説明】「爾」は、ここでは燕を指す。紹蘭が燕を選んだのは、燕が夫のいる場所を通ると考えたからである。
問十	やや易	【書き下し文】再読文字「当」に着目して選択肢をしぼる。ホは前半が若さの話になっており、文脈にそぐわないことは明らかだろう。
問十一	やや難	【傍線部理解】「憑」には「頼る・頼む」などの意がある。「寄与」は「おくり届ける」の意。ちなみに、「憑」の「魔物などがのりうつる」意は日本語の用法である。
問十二	標準	【理由説明】本文全体から判断する。ハは「不平不満を綴った…」が不適切。

(三) 随筆文。「野生と人間」について。

出典:今福龍太『宮沢賢治 デクノボーの叡知』。

《本文字数:約 3200 字=昨年より約 800 字増加。設問数:8=昨年と同じ。》

小問	難易度	コメント
問十三	標準	【漢字書き取り】A=「峡谷」、B=「火急」。Aが書けたか。
問十四	やや易	【傍線部理解】直前の「その姿の勇壮さに」から容易に判断できるだろう。
問十五	標準	【傍線部説明】直後の一文でその「感覚」が言い換えられている。ハは、「森の中で生きていたころに」が不適切である。
問十六	やや易	【空欄補充】次段落の第一文から容易に判断できるだろう。
問十七	標準	【傍線部理解】イは、「『森の主』として…」以下が本文にない。ニは、「山間部の…生息地を奪われ」が本文13行～19行の内容と異なり不適切である。
問十八	やや易	【空欄補充】bでイ・ロ・ニに絞り、cでイ・ロを消去できる。
問十九	標準	【傍線部理解】ニは、「森を切り開き…労苦を描く」が、ホは、「『サム・ファーザーズ』の死を受けとめていく」が、それぞれ不適切。
問二十	やや難	【構成や表現の理解】ハは、「野生動物と人間とのあいだの深い交感と厳格な掟をめぐる哲学的な主題」等、野生と人間との関係が繰り返し述べられていることから適切と判断できる。イは、「一般的な理解を否定している」が不適切。

(四) 評論文。「亡命者アドルノにとっての『認識』」について。

出典:藤田省三『精神史的考察』。

《本文字数:約 4500 字=昨年より約 100 字減少。設問数:5=昨年と同じ。》

小問	難易度	コメント
問二十一	標準	【傍線部説明】第一・第二段落の内容と照合する。「触覚」「物指し」は、「身体的感覚」「基準」の比喩であり、イ・ロはそれらを具体的なものとして捉えている点が不適切である。
問二十二	やや難	【傍線部説明】アドルノ達にとっての「認識」の意義の理解を問うている。第三段落だけでなく、第四・第五段落の内容も掴んだ上でないと判断できない。イが紛らわしいが、「実践から疎外された者」が不適切。「認識こそが…実践」である彼らが「実践から疎外」されるとは、認識活動もできないことになる。
問二十三	やや難	【傍線部説明】第四段落の内容と照合する。イは、「その根源性は」が、ハは、「社会的利害のせめぎあい」が、それぞれ不適切。ニ・ホの消去の判断には、傍線部3の「認識が…ではなくて…であればある程…」という形式と、各選択肢との対応を吟味することが役に立つ。
問二十四	やや難	【傍線部説明】第四・第五段落の内容理解が問われている。認識は「思考法の伝統」と『衝動』の地盤』の両者に支えられている、という内容である。イは、「思考法によって…徐々に…変えられていった」が不適切。ニは、「認識活動の根本で働く」ものが「衝動」のみとされている点が不適切。
問二十五	難	【記述】アドルノにとって亡命生活が「ただならぬ結晶」であった(前書き)ことについての文章全体の理解が問われている(第一・第二段落は字数の関係から入れることが困難だろう)。書くべき内容は、①認識と実践との関係、②衝動が認識の動力源であること、③亡命生活はその衝動を喪失させたこと、④「認識の歴史的次元」の説明、⑤「認識の歴史的次元」の意味を探る時に、喪失感を新たな衝動の地盤として認識活動に新たな段階をもたらすこと、という5点である。字数内でまとめるのがたいへん難しい。

〔総合コメント・今後の指針〕

全体の難易度は昨年並み。昨年と同様、大問四が非常に難しい。分量も多いので、時間内に終わらずに苦戦した受験生が多かっただろう。大問四にどれだけ時間をまわせたかで出来が大きく分かれるだろう。

大問一は、『増鏡』。昨年よりやや難化した。中納言が妹に恋心を抱いていることを読み取れたかどうか。高い読解力が求められている。

大問二は、『開元天宝遺事』。昨年よりやや易化した。基本・標準レベルの設問は得点しておきたい。

大問三は、「野生と人間」についての随筆文。昨年よりやや易化した。本文が比較的読みやすく、基本・標準レベルの設問がほとんどなので、ここでしっかりと得点しておきたい。

大問四は、「亡命者アドルノにとっての『認識』」についての評論文。難易度は昨年並み。抽象度の高い評論文で、かつ、選択肢も難しいので、読解に時間がかかるだろう。問二十五は本学部特有の論述問題だが、〈本文全体をまとめさせるタイプ〉だった。同タイプは 13・14・15・17・18・19・20 年にも出題されている。